

他科の先生に
知って欲しい

豆知識・・・眼科編②④

サギングアイ症候群とスマホ内斜視

Lino眼科 濱崎 一郎



近年、眼科において複視（物が二重に見える症状）を訴える患者の増加がみられます。その背景には、「サギングアイ症候群」および「後天性共同性内斜視（いわゆるスマホ内斜視）」という、二つの眼科的疾患が関与していると考えています。

サギングアイ症候群は、主に50歳代以降の中高年に多く見られる後天性の内斜視疾患です。高齢化社会となったことで近年患者が増加しています。加齢により眼球を支える結合組織である「プリー」が脆弱化することで発症します。プリーの劣化によって、特に外直筋のプリーが下方に偏位して、眼球が内転、下転、外方回旋するのが特徴です。主な症状は複視ですが、特に遠方視で顕著に現れます。斜視角が小さい場合には、「ぼやける」「焦点が合わない」といった曖昧な訴えとなることもあり、明確な複視ではないため注意が必要です。高齢者に生じるので白内障手術後に気付くこともあります。片目で見ると鮮明に見えるのが鑑別の一助となります。また、見た目にも特徴的な変化が現れることがあり、上まぶたのくぼみ、眼瞼下垂（まぶたが下がる）、下まぶたの膨らみなどを伴う場合があります。これらの顔貌変化は、眼窩プリーの構造的変化を反映していると考えられています。

若年では、後天性共同性内斜視の患者が増加している背景には、新型コロナウイルス感染症の流行による在宅時間の増加、GIGAスクール構想の推進、そしてスマートフォンの急速な普及など、現代社会におけるデジタルデバイスの使用環境の変化が大きく関係していると考えられます。特に10代から20代、さらには小中学生といった若年層での発症が顕著に増加しています。スマートフォンやタブレットなどを長時間、至近距離で使用することで、目を内側に寄せる内直筋が過緊張状態となり、寄り目が元の位置に戻らなくなることにより発症する後天性の内斜視です。過度な輻湊（目を寄せること）と調節（ピント合わせ）の負担が、この疾患の引き金となります。症状としては、目が内側に寄るのが特徴で、初期はたまに現れる程度ですが、進行すると常に内斜視の状態になります。複視もよく見られ、初期には遠方視で複視を感じ始め、進行すると近見時にも現れるため、学業や歩行など日常生活に大きな支障をきたします。眼精疲労や頭痛を伴うこともあります。1日3～4時間以上のデジタルデバイスの長時間使用、30cm以下の近距離使用、悪い姿勢、暗い場所での使用などが主なリスク因子として挙げられます。デジタルデバイスの使用時間を減らすことにより、症状が軽快することも知られています。若年層におけるこの疾患の増加は、現代のデジタルライフスタイルがもたらす近視の増加以外の新たな課題となっています。

これらの疾患は、プリズム眼鏡や斜視手術で治療できますので、もし、これらの疾患を疑われましたら専門医にご相談いただけますと幸いです。